断章
旭川のアイヌ語地名研究
144
高橋 基

―丸木舟の作製と天塩川下り―

前回の「今年のアイヌ語地名探訪」で、筆者は、昭和五十三年に、平取町二風谷を訪ねたことを記した。その目的は、二風谷の萱野茂さんを訪ね、その年に出版された、『アイヌの民具』の出版の祝辞を述べることと、丸木舟作製のご指導を受けることにあった。

今回も特別編として、「丸木舟の作製と天塩川下り」について書かせていただく。

当時、筆者が勤務していた音威子府(おといねっぷ)高校で、地名調査部を創設し、アイヌ語地名調査をしながら、北海道の三大河川、すなわち、石狩川・天塩川・十勝川を四人乗りのゴムボートで下った。昭和五十三年に、十勝川を下り、その年の秋から、丸木舟の作製に取りかかったのでした。学校に工芸科目が取り入れられ、その実習の一環としても活用する目的もあった。

写真①は、『アイヌの民具』の奥付に、萱野茂さんが、アイヌ語で書いて下さった、筆者へのメッセージです。次のような意味です。

私の書いた本を、あなたは見て、丸木舟を掘ろうと考えたようです。
一生懸命　丸木舟を掘るんだよ。
五三・八・十七　萱野　茂

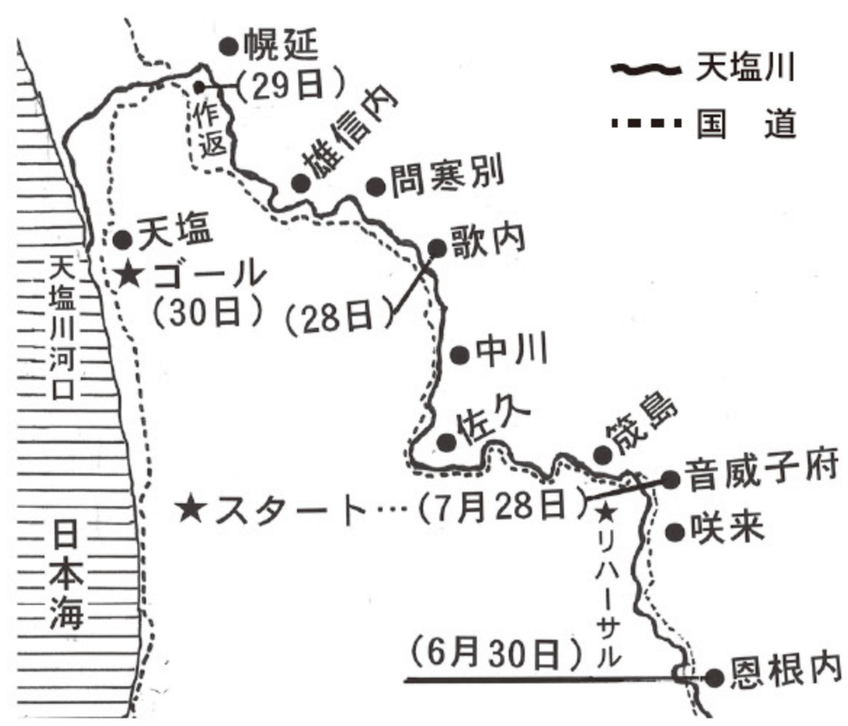
『アイヌの民具』の中で、萱野さんも書かれているが、昭和四十一年に苫小牧市沼ノ端の勇払川の川辺で発見された五艘の三百年前のイタオマチプ(板付き舟)や、萱野さんの作製した丸木舟など、当時現存した道内各地の丸木舟二十艘を参考にして、丸木舟の作製に取りかかった。

写真②　丸木舟作製道具

舟材の木は、美深林務署の許可を得て、河上木材の河上實社長のご協力で、物満内川(ものまないがわ)のチプニウシナイ(cip-ni-us-nay丸木舟・木・群生する・川)の桂の木を切ってもらった。しかし、残念ながら空洞があり使用できなかった。そこで、同じ物満内川の奥で、切ったまま放置されていた桂の大木を沢から引き上げて、校庭に運んでいただいた。ただ、ねじれのある大木で、作製には非常に苦労をした。

丸木舟作製には、電動工具は一切使用せず、村民に呼びかけて集めた、**写真②**のモッタ、チョウナ、サッテ、ハビロ等で、全校生徒の手によって、長さ約七十センチ、深さ約三十センチ、幅六・五メートル、

写真④　音威子府村スタート



写真③　天塩川下り行程図

文化祭にも特別展示をした。

昭和五十四年になって、**写真③**の行程図のように、六月三十日に美深町恩根内から、音威子府村まで、丸木舟で天塩川を下るリハーサルを行った。丸木舟の操舟は、初めての者には、簡単に出来るものではなかった。幸いにも、音威子府高校の校務補の大竹美代志さんは、物満内から筬島(おさしま)までの天塩川の船頭経験者であった。それで、**写真④**のように、丸木舟には、四人が乗り、前三人は、大竹さんの指示で、櫂(かい)(アシナプasnap)を漕ぎ、最後尾の大竹さんが櫂や棹(さお)(トゥリturi)を動かし、丸木舟を進めた。

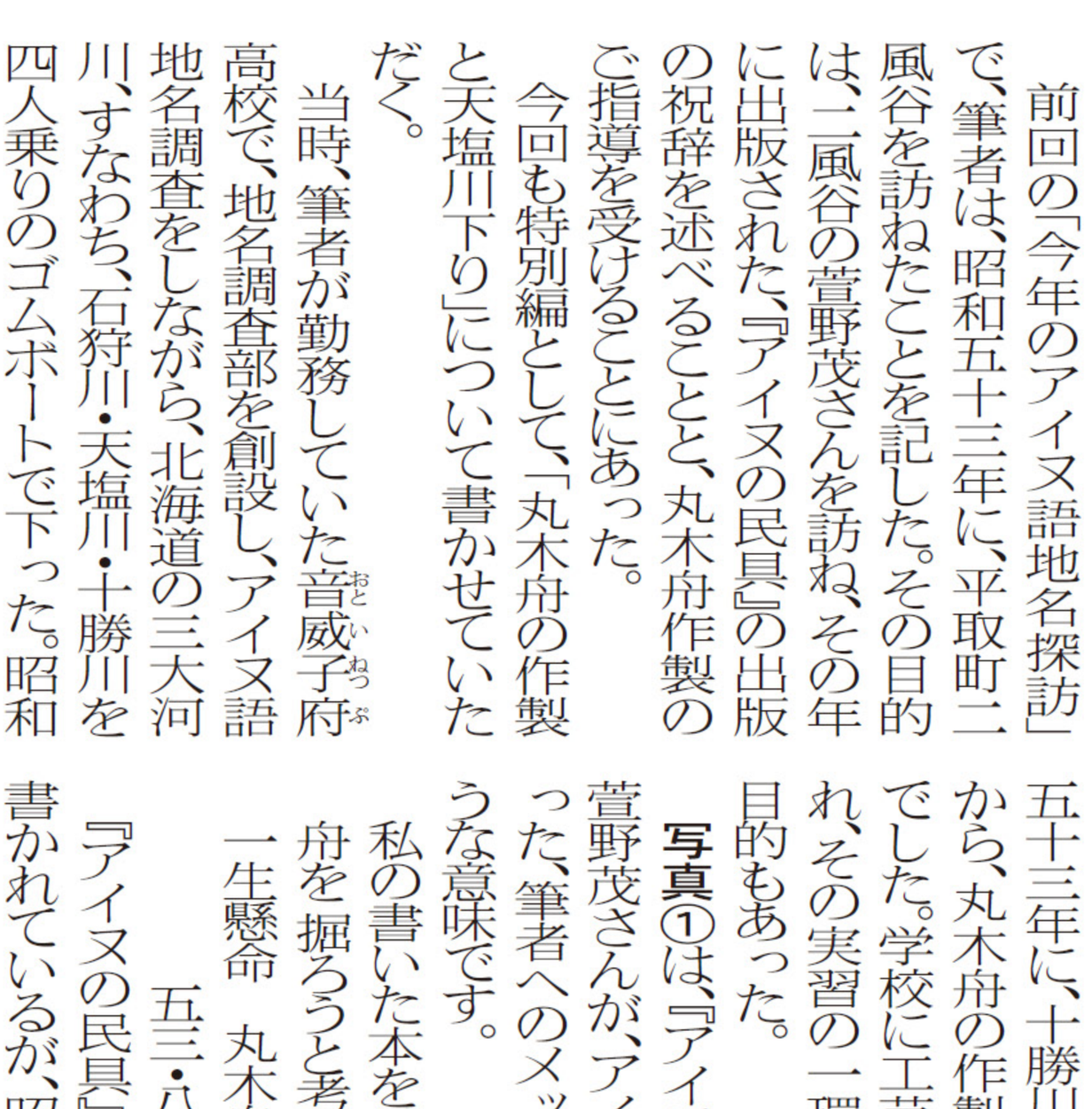
天塩川下りは、七月二十八日に音威子府をスタートし、中川町歌内(うたない)で一泊、翌二十九日は、天塩町作返(さくかえし)で二泊目、ゴールは、**写真⑤**のように、天塩町新栄通九の天塩川河口左岸に、七月三十日正午に到着し、丸木舟による、松浦武四郎の『天塩日誌』追跡踏査は終了した。

写真⑤　天塩川河口ゴール

四人乗りの丸木舟が完成した。この年は、完成を祝って、村の

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します


写真①　萱野茂さんのメッセージ